

汲古一心

「弘法大師の書に想う」

三 日本書道の原点・大師の書

この中で大師の書風を尊重し、最も大師の書に対する関心と呼び起すに力があつたものは、伏見天皇の第六皇子で、南北朝時代に天台座主になられたり、また辞めたり重ねて還補などというむずかしい時に、京都の青蓮院におられた尊円法親王の創始された「青蓮院流」すなわち一般に「お家流」と呼ばれて名高い流派は、室町・戦国時代を経て徳川時代に入ると、ほとんど公用文字の書あるいは国民書道といった観を呈して朝野をあげてこの流一色のようになり、寺子屋の草紙もひとえにこの書風の練習にあつたのである。

尊円法親王の父君にあられる伏見天皇も、「伏見院流」という一流創始のご能筆であられ、親王もその環境で、しぜん当時の宮廷人としての教養程度のものではなく、相当深い研究であられたことは疑いなく、そのご書風神髓の伝書で名著「入木抄」という一書もあつて、この書流が五、六世紀の間全日本を風靡すると、「入木抄」の伝は当然広い普及をしていった。

その初めの方に、

「弘法大師の執筆法には、図絵をのせられたり。

それもいささかいまのとりやうにたがはず候間云々」

とあつて、ご自分の書法も大師と同じ執筆法によるといわれている。

また応天門の扁額を書いた時のことを、「大師ほどの能筆ならでは、いかで不思議を現げざらん云々」などと、その書を讃嘆して、さらに大師が在唐時の逸話も記した後、

「弘法大師、前後の程の手跡大略一様也。

道風以後又各野跡の風也。云々」

と本朝書道の変遷を記述している。この野跡というのは、小野道風の筆跡ということで、日本に日本的性格の書風を確立したのは、小野道風に始まるといわれ全くその通りであるが、その道風書のヒン

トとしたものは、実は大師の書であつたのではあるまいかと思う。これはすなわち漢学全盛期から国風謳歌へと推移する中で、大師当時の日本調斟酌と、その後の文化の趨勢に順応する形によるものであろう。

ただ書もまた自由に思想・嗜好にしたがつて、表現に新意匠を盛るべきである。そして記録の用に立つと同時に鑑賞としての大きな意義もあるという態度は、実に大師に出発したものと考へるのである。法親王も同じくこの理解の上に立つて、最も大衆的な明るく習得にも便な書風を創出されたので、空前の汎く、長く各時代にわたつての流行をもしたものであろう。

このような書道伝授の要訣の書に、大師の書に関する記事が大きく扱われたことは、書道に関する大師の存在を非常に普及すると同時に、宗門の信仰とも相俟つて、愉しい伝説や俗説も随分生まれてきたようである。

このお家流流布が広まるにつれて、末端においてはまた本来のものは失われて俗になり過ぎ、型だけのものも多くなつて、別に唐様と称して中国の明・清風に倣うものも出たり、あるいは各々大師流の好むところを探り入れて、京都賀茂神社の社家の人・藤木敦直による「賀茂流」、石清水八幡宮滝坊の真言僧松花堂昭乗による「松花堂流」、その他多くの流派も生じて、大師の影響は測り知れないものがある。しかし、その特色も見失われその原点を忘れかけたところで、明治以後の中国古典の研究、上代和様の復興となつてきたのであり、そして、戦後三十年に近い昨今にいたつては、またまた自国の名蹟に対する関心が昂まり、多くの研究書も刊行されつつある。ご生涯から千二百年に当たるといわれる大師と、日本上代の名僧中最も伝存筆蹟量の多い、この書風に見る大師の強烈な、そして深い進歩的な姿勢にしみじみ感動を禁じ得ないものがある。

「大法輪」昭和四十八年七月

「筆間雜記」中村素堂隨筆集昭和六十三年刊より転載。